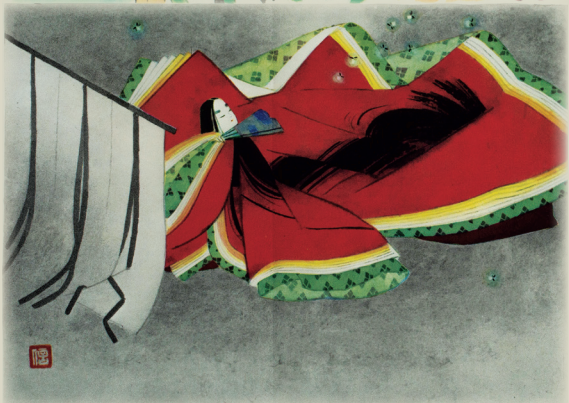


郷土博 通信

No.24

2024 秋



源氏物語



『潤一郎新々訳 源氏物語』(解説8頁)



CONTENTS

■『潤一郎新々訳 源氏物語』	1	■陶芸体験講座II	7
■展示室の紹介	2~3	■『潤一郎新々訳 源氏物語』について	8
■『塩俗問答集』から見える讃岐の塩	4~6	■INFORMATION	8

第2展示室

百敵砲と憤龍

久米通賢[1780(安永9)年～1841(天保12)年]は、天文、測量、武器類の開発、土木(坂出塩田の開発)、経済政策の献策など、多くの分野で活動し業績を残しました。

なかでも武器類の開発については、1807(文化4)年に「武備機械鉤玄」という武器類に関する書を著して高松藩に提出しました。その後、1823(文政6)年8月には高松藩領内の郷東河原において、高松藩9代藩主松平頼恕の臨席のもと、歩兵戦と海上戦を想定した2日間にわたる砲術演習を行いました。このようにして、久米は武器類の開発についても優れた能力を有することを高松藩領内外に知らしめたのでした。

当館所蔵の百目玉筒「百敵砲」(図1)には、1824(文政7)年の夏に仏生山(高松市)の「河地時倅の求めに応じてこれを製す 用法一卷附 久米某(花押)」と砲身に陰刻されています。砲身は台車に据え付けられ、前部を持ち上げて移動させることができます。台車には引き出しがあり、そのひとつに砲身の後部上面の穴から導火薬を入れる薬信筒が収納されています。弾丸は直径約4.0cmの百目玉(重さ約375g)を用い、それを鑄造する弾機という道具も残されています。また当館には、「百敵砲」の見取り図(図2)も残されています。これには銃口から弾薬を装填する際に用いる棒状の「カル架」や、砲身の角度を変えるための「前棒」が描かれています。砲身の刻銘枠には夜の戦陣や山谷の道を守備する時に用いると記されており、1823(文政6)年の砲術演習で用いた「百目御筒」の使用場面(典拠資料『鶏肋瑣話^(※)』)と合致することから、当館所蔵の「百敵砲」と同一砲が演習でも使用されたと思われます。

火矢筒「憤龍」(図3)は、1839(天保10)～1841(天保12)年頃の作と思われ、「百敵砲」と口径はほぼ同じながら、砲身の長さは半分で、車輪のない砲架に乗っています。「百敵砲」が百目玉の砲弾が発射されるのに対して、「憤龍」は棒火矢と呼ばれる羽のついたロケットのようなものが発射されて、建物や船などに着弾した後に発火して燃焼させるものといわれています。

いずれも久米が考案したもので、砲身には細かな模様が施され、隸書体で「百敵砲」「憤龍」という独自の名称が陽刻され、台車や砲架の色彩と前脚部の唐草模様(憤龍は金箔押)を組み合わせるなど、実用一辺倒の無骨な銃砲類とは違う、久米らしいデザイン感覚の良さを感じるのは私だけでしょうか。「百敵砲」と「憤龍」を一度に見ることができる機会ですので、関連資料と合わせて楽しんでいただきたいと思います。(齊藤 祐司)

(※) 著者の木内 龍山は、香川郡円座村(高松市)出身。久米通賢と親交のあった伊藤弘(南岳)の門下で幕末勤王の志士。同書は久米の砲術上覧の記事など藩領内の出来事のほか、江戸・京・長崎・紀州などの話題を書き記したものの。



▲図1 百目玉筒「百敵砲」と薬信筒
総幅29.2 総長88.7 高31.0
砲身長72.9 口径4.1cm



▲図2 百目玉歩戦仕立 百敵砲図



▲図3 火矢筒「憤龍」
総幅19.1 総長67.0 高26.0
砲身長32.0 口径4.0cm

第3展示室

(展示期間:10月~3月)

近代香川の博覧会

1862(文久2)年、ヨーロッパ諸国と開港など貿易にかかわる交渉をするためにロンドンに到着した竹内使節団は、日本人として初めて万国博覧会(第2回ロンドン万博)を見物しました。団員であった福沢諭吉は後に『西洋事情』でこの万博の様子を紹介し、博覧会は「相教え相学ぶの趣意にて互いに他の長所を取て己の利となす」ものと伝えています。明治維新後、政府は殖産興業政策の一環として内国勸業博覧会を開催しました。

また地方においても博覧会はさかんに開催されました。香川県では明治初期に金刀比羅宮で博覧会が開催されています。

1873(明治6)年の「金刀比羅宮博覧会」は3月1日に始まりました。当時の引札(チラシ)には、神庫の諸品をはじめ各地から様々な物品を集め、我国の栄誉、技術力、歴史の素晴らしさを広く知ってもらいたい、とあります。はじめは4月中旬までの予定でしたが、5月31日まで延長されました。この博覧会の様子を伝えるものとして、当館に目録(図1)が残されています。古文書、古美術、武具、考古資料、各地の名産品、鉱物等さまざまな展示品総数857点が掲載されており、なかには西洋製機械類やフランスの油絵もありました。展示物のほとんどは金刀比羅宮所蔵品のほか、県内の社寺や個人所有者から出品されたものです。



▲図1
『金刀比羅宮博覧会品物目録』
(一〜五と追補一の計6冊があります。)

1879(明治12)年3月1日から6月15日までは「琴平山博覧会」が開催されました。目的は前回と同様でありながらも今回は内務省や工部省などの中央官庁や各府県から総数8万2,508点の出品物が集まり、表書院などで展示されました。当時まだ珍しかった油絵も出品されており、現在も金刀比羅宮 高橋由一館で公開されています。この博覧会の入場者数は26万5,452人でした。

このように金刀比羅宮での博覧会に多くの人々が訪れ大成功をおさめた背景には、江戸時代から続く金毘羅参詣が盛んであったため、抜群の知名度に加えて交通網や宿泊所などが整備されていたことが考えられます。

金刀比羅宮での博覧会から約50年後、1928(昭和3)年3月20日から5月10日まで高松港修築工事完成記念事業として高松市主催「全国産業博覧会」が高松城跡で開催されました。香川新報は開会式当日に博覧会特集を組んでいます(図2)。“産業博覧会”の名が示すとおり、会場では全国の特産品等15万4,295点が展示されました。さらに無料演芸館や子供の国(遊園地)といったアトラクションのほか、仮装行列・花火大会・駅伝競走・相撲競技会など各種催し物も毎日のように行われ、50日間の会期中に約49万人もの人々が訪れています。



▲図2 「香川新報」
1928(昭和3)年3月20日

このように金刀比羅宮での博覧会から約50年後、1928(昭和3)年3月20日から5月10日まで高松港修築工事完成記念事業として高松市主催「全国産業博覧会」が高松城跡で開催されました。香川新報は開会式当日に博覧会特集を組んでいます(図2)。“産業博覧会”の名が示すとおり、会場では全国の特産品等15万4,295点が展示されました。さらに無料演芸館や子供の国(遊園地)といったアトラクションのほか、仮装行列・花火大会・駅伝競走・相撲競技会など各種催し物も毎日のように行われ、50日間の会期中に約49万人もの人々が訪れています。

2025年には「大阪・関西万博」が開催されます。世界各国の文化や技術を学び合い、未来に活かす博覧会を心待ちにしたいと思います。

(宮武 尚美)

『塩俗問答集』から見える讃岐の塩

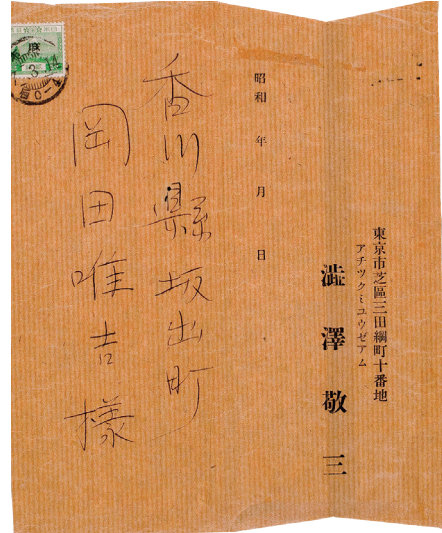
はじめに

7月に日本の紙幣が一新され、一万円札の図柄(肖像)は福沢諭吉から渋沢栄一に変わりました。

渋沢は明治～昭和時代の著名な実業家で、製紙・紡績・保険・運輸・鉄道など多くの企業の設立や経営に関わり、「日本資本主義の父」といわれています。

その渋沢の嫡孫に^{しづさわけいぞう}渋沢敬三という人物がいます。第二次世界大戦中は日本銀行総裁を務め、戦後は大蔵大臣として破綻した日本経済の復興に尽力しました。

その敬三から当館の岡田唯吉に宛てた封筒(図1)が残されています。消印は昭和7年(1932)3月14日です。今から約90年前、二人の間でどのようなやり取りがあったのでしょうか。



▲図1 渋沢敬三からの封筒

1 民俗学者の渋沢敬三

敬三は、自分のことを次のように言っています。

「私は得体のしれない男だ。実業家かもしれないし、政治家かもしれない。学者なのかもしれない。」

学者と称しているとおり、柳田国男や折口信夫と並び称される我が国屈指の民俗学者ですが、現在では彼の名を知る人は少なくなっています。

封筒の差出人住所には「アチツクミュージアム」と書かれています。直訳すると「屋根裏博物館」となります。敬三が東京帝国大学経済学部を卒業した1921(大正10)年に、個人で開設した博物



▲図2 釣り上げた鯛を持つ渋沢敬三
(文献②より転載)

館で、自邸の車庫の屋根裏を利用したことから名づけられたものです。当初は郷土玩具などを収集・陳列していましたが、次第に研究組織へと発展していきました。

岡田に手紙を出したのは、敬三の民俗学者としての研究活動の一環でした。

2 『塩俗問答集』と岡田の回答

手紙の用件は、塩の貯蔵や配給方法、塩のことわざ、塩を使った民間療法、年間消費量など、塩に関する21項目についてのアンケートです。岡田が回答したものの写し(図3)が当館に残されています。

同様の依頼は、日本各地や朝鮮半島の150余名に送付され、その回答を整理編集したものが、『^{えんぞくもんどうしゅう}塩俗問答集』という書名で、1939(昭和14)年に発刊されました。

この書物は、日本における塩と人間生活のかかわり合いを調べた最初の研究であったとって



差し支えないと、民俗学者の宮本常一は高く評価しています。

当時日本では塩の研究は遅れており、1905（明治38）年に日本専売局がそれまでの製造法や販売法についての調査結果を『大日本塩業全書』として出版した以外の研究はなく、特に日常生活における人と塩とのつながりやその地域色などは、全く知られていませんでした。

15	質問事項 塩の産地 ありしや ナシ 例 大正製糖株式会社 現在ニ於テモ日本全国生産額ノ約三分ノ一ノ主要産地ナルヲ以テ他地方ヨリ供給ヲ受ケレドモ 例 塩産地ニ 往時塩同屋ナモアララズ生産者配係開エル一切ノ取扱ヒヨシカモ他特別ノ機関ナシ 例 大正製糖株式会社 往時塩同屋ナモアララズ生産者配係開エル一切ノ取扱ヒヨシカモ他特別ノ機関ナシ
16	質問事項 塩の産地 ありしや ナシ 例 大正製糖株式会社 現在ニ於テモ日本全国生産額ノ約三分ノ一ノ主要産地ナルヲ以テ他地方ヨリ供給ヲ受ケレドモ 例 塩産地ニ 往時塩同屋ナモアララズ生産者配係開エル一切ノ取扱ヒヨシカモ他特別ノ機関ナシ 例 大正製糖株式会社 往時塩同屋ナモアララズ生産者配係開エル一切ノ取扱ヒヨシカモ他特別ノ機関ナシ
17	質問事項 塩の産地 ありしや ナシ 例 大正製糖株式会社 現在ニ於テモ日本全国生産額ノ約三分ノ一ノ主要産地ナルヲ以テ他地方ヨリ供給ヲ受ケレドモ 例 塩産地ニ 往時塩同屋ナモアララズ生産者配係開エル一切ノ取扱ヒヨシカモ他特別ノ機関ナシ 例 大正製糖株式会社 往時塩同屋ナモアララズ生産者配係開エル一切ノ取扱ヒヨシカモ他特別ノ機関ナシ
18	質問事項 塩の産地 ありしや ナシ 例 大正製糖株式会社 現在ニ於テモ日本全国生産額ノ約三分ノ一ノ主要産地ナルヲ以テ他地方ヨリ供給ヲ受ケレドモ 例 塩産地ニ 往時塩同屋ナモアララズ生産者配係開エル一切ノ取扱ヒヨシカモ他特別ノ機関ナシ 例 大正製糖株式会社 往時塩同屋ナモアララズ生産者配係開エル一切ノ取扱ヒヨシカモ他特別ノ機関ナシ
19	質問事項 塩の産地 ありしや ナシ 例 大正製糖株式会社 現在ニ於テモ日本全国生産額ノ約三分ノ一ノ主要産地ナルヲ以テ他地方ヨリ供給ヲ受ケレドモ 例 塩産地ニ 往時塩同屋ナモアララズ生産者配係開エル一切ノ取扱ヒヨシカモ他特別ノ機関ナシ 例 大正製糖株式会社 往時塩同屋ナモアララズ生産者配係開エル一切ノ取扱ヒヨシカモ他特別ノ機関ナシ
20	質問事項 塩の産地 ありしや ナシ 例 大正製糖株式会社 現在ニ於テモ日本全国生産額ノ約三分ノ一ノ主要産地ナルヲ以テ他地方ヨリ供給ヲ受ケレドモ 例 塩産地ニ 往時塩同屋ナモアララズ生産者配係開エル一切ノ取扱ヒヨシカモ他特別ノ機関ナシ 例 大正製糖株式会社 往時塩同屋ナモアララズ生産者配係開エル一切ノ取扱ヒヨシカモ他特別ノ機関ナシ
21	質問事項 塩の産地 ありしや ナシ 例 大正製糖株式会社 現在ニ於テモ日本全国生産額ノ約三分ノ一ノ主要産地ナルヲ以テ他地方ヨリ供給ヲ受ケレドモ 例 塩産地ニ 往時塩同屋ナモアララズ生産者配係開エル一切ノ取扱ヒヨシカモ他特別ノ機関ナシ 例 大正製糖株式会社 往時塩同屋ナモアララズ生産者配係開エル一切ノ取扱ヒヨシカモ他特別ノ機関ナシ

▲図3 岡田の回答の写し

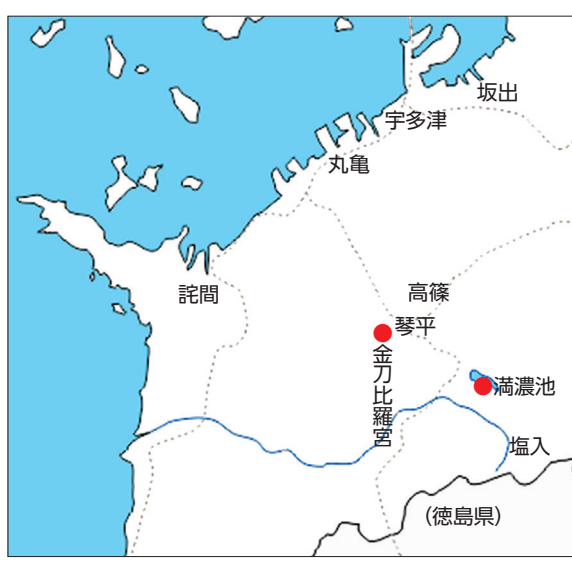
当館の岡田の回答は、産地としての特徴がにじみ出ています。例えば、「貴地方の塩は何れの地より来るか」という質問に対して、「現在においても日本全国生産額の約三分の一の主要産地なるをもって、他地方より供給を受けることなし」（図3）と答えており、問答集にはこの回答は採録されていません。また塩に関することわざや説話についても、「塩田小唄」や「浜引唄」など塩づくりの俗謡を紹介するなど、ここでも他地域の回答とは異なる内容となっています。

3 詫間塩と高篠

前項の「貴地方の塩は何れの地より来るか。又はその名称」という質問に対して、香川のもう1人の回答者である高篠村の収入役であった今田助四郎は、「三豊郡詫間の塩がもっとも名高い。詫間塩」と回答しています。

これは、地理的な面から見た場合ちょっと意外な感じがします。

高篠村は現在の仲多度郡まんのう町の北端に広がる高篠地区で、北は善通寺市、東は丸亀市、西は琴平町に接し、金刀比羅宮の北東4kmの位置になります。



▲図4 香川県西部の略地図

当時、香川県西部の製塩地は、坂出・宇多津・丸亀・詫間の4地域で、高篠村との位置関係を見ると、前3地域は丸亀平野を南に10~13km下ればよいのに対して、西の詫間からは山間の道を18km移動しなければならず流通圏としては不利と思われるからです。

「もっとも名高い」とは、具体的にどのようなことを意味しているのでしょうか。詫間における塩づくりは古代からあり、中世では『兵庫北関入船納帳』にもその名が見えます。江戸時代の天保年間に丸亀藩によって大規模な塩田築造がなされ塩づくりがさらに盛んになり、製品は阿讃山脈を越えて、阿波（徳島県）や土佐（高知県）にも運ばれていました。戦前には塩田面積や生産高は香川県の約一割を占める県下有数の塩業地でした。

詫間から高篠へ塩が搬入されるルートは、詫間琴平線（現在の県道23号線）が利用されたと思われる、佐文からは牛屋口を越えて琴平町に入ったのでしょう。

琴平は、江戸時代以来金毘羅参詣のための街道が四方から集まり、多くの人や物が往来する香川県西部の交通の中心地でした。

4 琴平と塩入街道

琴平の南方面には、金毘羅参詣や物資流通のため、昔から阿讃山脈を越える多くの峠道が通じていました。このうちの一つに「塩入街道」と呼ばれる山道（図5）があります。JR土讃線は1929（昭和4）年に池田まで開通しますが、それまではこの街道（現在の主要地方道丸亀三好線）が阿波と讃岐を結ぶ重要な交通路でした。塩入は、満濃池の南4kmにある地区名で、阿波への塩の入り口であったことから、この名が生まれたとされています。



▲図5 現代の塩入街道(奥の山並みが阿讃山脈)

この道は、塩ばかりでなく米や借耕牛かりこうしも通っていました。借耕牛とは1955（昭和30）年頃まで讃岐の農家が阿波から牛を借りて耕作する習わしがあり、この牛をこのように呼んでいました。

現在の徳島県東みよし町屋間方面から、この街道を通り塩入部落の農家の庭に継がれた牛は、現在の高篠地区をはじめ、まんのう町の四条・神野・吉野等の農民が賃借していました。

この街道の阿波側の集落では、生活様式や民俗芸能・方言等に讃岐の影響が見られるという民俗調査結果があります。

今田が「名高い」と評したのは、このような広域の経済・文化圏を代表するものの一つが詫間塩であったということを暗示していたと思えるのです。（館長 大山 眞充）

【引用・参考文献】

- ①アチック ミューゼウム編『塩俗問答集』（アチック ミューゼウム彙報第三四）丸善株式会社 1939
のちに渋沢敬三編『塩俗問答集』常民文化叢書<3> 慶友社 1969 として再刊
- ②渋沢敬三『祭魚洞襍考』岡書院 1954
- ③佐野眞一『旅する巨人 宮本常一と渋沢敬三』文藝春秋 1996
- ④宮本常一「塩の道」『道の文化』講談社 1979
- ⑤富岡儀八『塩の道を探る』岩波新書 1983
- ⑥詫間町『詫間町誌』1971
- ⑦仲南町『仲南町誌』1982
- ⑧満濃町役場『満濃町史』1975
- ⑨香川県『香川県史6 近代Ⅱ』1988
- ⑩橋禎男「三好町の峠道」『阿波学会研究紀要一郷土研究発表会紀要』第39号 阿波学会 1993
- ⑪岡泰ほか「三好町の歴史」同上

陶芸体験講座Ⅱ

黒田陶房 黒田 ^{おおき}大 先生
黒田 真里子 先生

「夏休み！埴輪づくり」を終えて

黒田 大

2024（令和6）年7月27日（土）に小中学生を対象に「夏休み！埴輪づくり」を開催いたしました。当日は事前予約された26名の小中学生が集まり、学芸員の方から埴輪のことについて教わった後に体験講座が始まりました。

① 埴輪とは？

粘土で人や動物、建物など様々なものをかたどって古墳の墳丘の上や周囲に並べられた物です。

② 土偶と埴輪の違い

土偶は「縄文時代の素焼きの人形」

埴輪は「古墳時代の墳丘に並べられた焼物」というように時代と用途が異なります。

③ 埴輪の種類

- ・筒や壺の形をしたもの
- ・^{かぶと}兜や盾、船等道具の形をしたもの
- ・家の形をしたもの
- ・馬や鹿、猪、鳥等生き物の形をしたもの
- ・人の形をしたもの

古墳時代の初期は筒型のものしかありませんでしたが時代を経て種類が増えていきました。

④ 埴輪の作り方

粘土を紐状にしたものを積んで制作し、完成した後よく乾燥させ焼成します。

窯で焼く技術が広まるまでは野焼きでしたが、窯で焼く技術が広がる古墳時代中期以降は窯で焼成されました。



制作の様子

今回の体験講座では人の形をした埴輪づくりをしました。たたら状（板）に伸ばした粘土を素焼き型に巻いて人形埴輪の原型を作り、そこに作り手の自由な発想でオリジナル埴輪として完成させました。完成した作品はしっかり乾燥させた後、約800度で焼成します。

強そうな埴輪、怪獣みたいな埴輪、猫形埴輪、優しい埴輪などどれも個性で溢れています。時間を忘れて楽しそうに制作する小中学生の姿はまるで古墳時代の職人さんの様でした。



制作した埴輪たち

『潤一郎新々訳 源氏物語』について

(表紙解説)

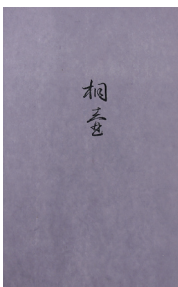
1000年以上の時を超え今なお愛され続ける紫式部の『源氏物語』。日本最古の長編小説と言われ、時代ごとの言葉に訳され読み継がれてきました。

当館では、江戸時代から昭和までに発行された現代語訳や評釈など『源氏物語』に関する資料を多数所蔵しています。中央公論社から出版された谷崎潤一郎の『潤一郎新々訳 源氏物語』は、著者3回目の翻訳で旧仮名や旧漢字を見直したものです。1966(昭和41)年に発行された「彩色挿画入豪華版」では装丁や巻立を改めて、白描だった挿絵に彩色を施しています。安田鞞彦、奥村土牛、福田平八郎、堂本印象、山口蓬春、中村岳陵、上村松篁、徳岡神泉、小倉遊亀、堅山南風、中村貞以、山本丘人、橋本明治、前田青邨という錚々たる日本画家たちが作品を寄せました。今回の表紙には、その中から6名の挿絵を掲載しています。装丁と題字(表紙・図1)は谷崎の妻で随筆家の谷崎松子が手掛けました。谷崎の流麗な雅文体(平安時代の仮名文に擬した文体)の訳に、四季の移ろいや人物の表情といった、絵による豊かな表現力も加わり『源氏物語』の世界を生き生きと彩っています。なかでも安田鞞彦は歴史画の大家で、また能書家でもありました。先に発行された「挿画入豪華版」では谷崎たっての願いで挿絵だけでなく、装丁と題字と中扉の文字も依頼するなど密な関係があったようです。

谷崎は翻訳にあたって原文の敬語を生かして、原作の空気感と口語体の調和を試みました。訳本には翻訳者の個性が鮮やかに出ており、古典を肌感覚で楽しむことができる技術が詰まっていると思われます。それだけではなく、社会状況や言葉の変化によって、いかようにも読み手の解釈が広がることも、現代語訳で『源氏物語』を読む味わい深さと言えるのではないのでしょうか。(矢野 愛)

【参考文献】

- ・東京学芸大学教授河添房江, 180111_yomiuri_.pdf (u-gakugei.ac.jp), (参照 2024-05-26)
- ・中央公論社『谷崎潤一郎新々訳源氏物語』序 付記(1966)



▲図1 「桐壺」
題字:谷崎松子



▲図2 「賢木」挿絵:福田平八郎

INFORMATION

■鎌田共済会郷土博物館 第14回公開講座

「香川県内の銅鐸出土地とその特徴」

2024年10月26日(土) 13:30~15:00

場 所: 坂出市民ふれあい会館 2階

講 師: 竹内裕貴氏

(香川県教育委員会 生涯学習・文化財課)

【申込10月1日火から、先着100名、参加無料】

電話またはホームページからお申込み下さい。

電 話: 0877-46-2275

H P: <https://www.kamahaku.jp>

※詳しくはホームページをご覧ください。



■刊行のお知らせ

『内間銅鐸調査報告』

東京国立博物館、香川県教育委員会、当館職員による調査報告書。発見時の状況や最新研究の成果、県内銅鐸についての情報が満載です。

※お問合せは当館まで (TEL: 0877-46-2275)

鎌田共済会郷土博物館



Access

高松から…快速マリンライナーで約15分
岡山から…快速マリンライナーで約40分
JR予讃線坂出駅から徒歩5分
※駐車場あり

開館時間: 午前9時30分~午後4時30分 (入館は4時まで)

休 館 日: 月曜日/祝日

夏季特別 (8月13日~15日)

年末年始 (12月29日~1月4日)

入 館 料: 無料



- ①若葉上 小倉遊亀
- ②螢 上村松篁
- ③東屋 橋本明治
- ④帚木 安田鞞彦
- ⑤行幸 徳岡神泉
- ⑥絵合 山口蓬春